

Glocal Tenri



月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.24 No.12 December 2023

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

12

CONTENTS

- ・ 巻頭言
Devil's advocate (悪魔の代弁者)
／井上 昭洋 1
- ・ 文脈で読む「身上さとし」(10)
明治 21 年 2 月～4 月
／深谷 耕治 2
- ・ 音のちから—中国古代の人と音楽 (17)
出土楽器が語る音の世界—瑟—
／中 純子 3
- ・ ヴァチカン便り (65)
モンゴルへの司牧の旅
／山口 英雄 4
- ・ ニューヨーク通信 (18)
NY インターフェイス平和の集い
／福井 陽一 5
- ・ 思案・試案・私案
「碍」の字表記問題再考 (最終回)
結び
／八木 三郎 6
- ・ 2023 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』
に学ぶ (9)
第 4 講：146 「御苦労さん」
／澤井 治郎 7
- ・ おやさと研究所ニュース 8
第 361 回研究報告会「諸井慶徳の宗教論—教義学との連関をめぐって—」
(9 月 27 日)／トルコでの国際ワークショップに参加 (10 月 4 日)／
2023 年度公開教学講座のご案内／
2022 年度「教学と現代」

巻頭言

Devil's advocate (悪魔の代弁者)

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

Devil's advocate (悪魔の代弁者) とは、カトリックにおいて聖人や福者の候補者を審議する際、候補者自身の欠点や提出された証拠の欠陥を指摘するために設けられた役職のことであった。転じて現在では、ある主張の妥当性を明らかにするために、あえて疑義をただしたり、批判や反論をしたりする人のことを指す。ディベートにおけるテクニックであり、また組織の意思決定プロセスにおいてより適切な判断を下すために、意図的にそのような立場をとる人を設定したりする。

私が初めてこの言葉を聞いたのは、留学時代の大学院の歴史学のゼミでのことだった。研究においては常に自分自身の中に Devil's advocate を設定することがより良い考察をするために必要である、といったことを指導されたように記憶している。ある歴史的な事象を解釈する際に独りよがりにならないために、反対の立場をとり疑問を投げかけるもう一人の自分を常に自分自身の中に持て、ということだったと思う。研究においては常に異なる解釈の可能性を考えたつ考察を進めていくのは当然のことだ。ただ、その「異なる」解釈は必ずしも先行する解釈に相対するものではなく、単なるもう一つの解釈であることも多い。そのため、より研ぎ澄まされた結論を導き出すためには、自らの解釈に反論し、それを否定する立場や意見を意図的に設けること、すなわち Devil's advocate 的な視点を導き入れることが重要になってくるというわけだ。

しかしながら、人は同時に異なる立ち位置から対象に視線を投げかけることはできないので、自分自身のなかに Devil's advocate を持つことは実際のところ難しい。ただし、調査される側と調査する側、文化のインサイダーとアウトサイダーというように相対する 2 つの立場を併せ持つネイティブの人類学者であれば、自分の文化に対してどちらの立場に立つにせよ、自らのなかに Devil's

advocate を持つことができるだろう。自文化に対して距離を取ること、自文化に対して他者性を身につけることが求められるので、厄介ではあるが、2 つの相対する立場を備えていることは研究者としての強みにもなる。ネイティブ人類学においては、そのような認識論的な問題に加え、ネイティブ人類学者のハイブリッドな立場を生かした方法論についても議論が重ねられてきた。

信仰を持つ宗教研究者が自分の信仰する宗教を自身の学問 (ディシプリン) を用いて研究する場合も、研究者と信仰者の 2 つの相対する立場を併せ持ったまま、対象にアプローチすることになる。しかし、研究者であり信仰者であるというハイブリッドな特性を活かして自分の信仰する宗教を研究することの意味や可能性について、十分な議論がなされてきたようには思われない。少なくとも天理教を信仰する研究者が、自身のハイブリッドな立場を意識しつつ、天理教について自らの学問の理論を用いて研究するということはほとんどなかったのではないだろうか。

自分の宗教を扱う時は宗教学者・人類学者としてではなく、神学者・宗教家として接する。宗教学や人類学の理論を用いず、それらの学問の研究者としてのもう一人の自分に目をつぶり、安全な領域 (神学の分野) で対処する。研究者として自分の信仰する宗教に正面から取り組むには認識論的問題を乗り越えねばならないし、鍛えられた方法論も必要だ。かつて、キリスト教を受容して間もない非西洋社会の人々を「日曜日はキリスト教徒、月曜日は呪術師」と (やや見下して) 形容することがあったが、同じような使い分け・棲み分けが、研究者の側でもなされてきたわけである。Devil's advocate を内なる他者として持つこと (アウトサイダーとして自分の宗教を研究すること) が難しいのであれば、リアルな他者、すなわち、未信者の研究者との対話を積極的に試みるべきだろう。